

春日市議会 総務文教委員会

行政視察

期 日：平成26年5月27日～29日（2泊3日）

視 察 先：愛知県西尾市「アーティストバンク」

愛知県小牧市「学びの共同体事業」

愛知県大府市「幼保小中連携教育」

視察行程：別紙参照

1. 愛知県西尾市「アーティストバンク事業」について



西尾市においては平成21年「西尾市文化振興プラン」を策定し、その中で「文化・芸術を身近に感じ、生きがいのある町」を目指すものとした。その具体的な取り組みとして「地元出身の芸術家の活動の場づくり」を目指して、西尾市アーティストバンク制度を開設している。これは西尾市在住・在勤もしくは西尾市出身のアーティストの人材情報を集積・公開することで、ア

ーティストの発表の場を拡充するとともに、西尾市民に芸術鑑賞及びワークショップなどの芸術体験の機会を提供する事で、西尾市及び西尾市民の芸術・文化活動の振興に寄与することを目的としている。

登録までの流れとしては

①広報等を通じてアーティストに呼び掛けを行い、登録フォームに記入後申請

↓

②文化振興課において審査（適正でない場合は登録されない事もある）

↓

③登録事項のうち同意を得た物を市のホームページ並びに広報誌に掲載するものである。

この後、市民からの問い合わせに関して一旦行政が窓口となり、バンク登録者の紹介を行う。但し、事業内容の打ち合わせ・費用等については当事者間で行うものとして行政は関与しないとされている。現在登録者は個人19名、団

体6団体である。^{※1}昨年度の実績では市民からの問い合わせは12件で、次第に情報が定着しつつあるとの感触を執行部としては持っているようである。

当初、市の職員からの説明を聞くまでは、この制度が市民の側にスタンスを置いた、即ち、様々な芸術の情報、「パーティで演奏してくれる人がい



ないか」であるとか「絵画を教えてくれる人はいないか」と言ったものに対応する為の事業であると勝手に理解していたが、これはむしろ芸術家の側にスタンスを置いた事業である事に驚きを受けた。そもそもの市としての狙いが芸術家の活動の機会を増やす事、即ち、芸術家の他市への流出阻止が事業展開の根底にあるように思われたし、実際説明でもその事は明言されていた。これはその空気を実感している者のみが得られる感覚であろうが、電車でわずか30分の場所に名古屋市と言う日本でも冠たる大都市を抱え、ともすれば全ての有能な人材がそこへ流れて行く事に対する猛烈な危機感の現れであると思われる。事業内容自体は、当市において展開されていた「お宝百選」^{※2}に似ている感もあるし「音楽の玉手箱」^{※3}事業にも通じるところがある。しかし、そのどちらも性格を異にしている。登録と紹介のみに特化した事業と言うあたりが特徴と言えは特徴であろう。今後の展開としては、現在の25個人・団体の登録者数を更に増やし、アーティストがさらに活動しやすい環境整備を図りたいそうである。確かに、これが拡充し認知度が上がれば、芸術家にとっては西尾市に住まう事の大きいインセンティブになる事は間違いない。ただ、敢えて苦言を呈すのであれば、そこに登録されている芸術家の望みと、市民との要望に大きい乖離が生じるようでは事業が体を為さなくなるのではないだろうか。今後の行き違いを無くすためにも、やはり先に市民が真に求める情報を今一度噛み砕いて、それに応えられる事を登録の際の条件に加えて上で事業の展開をしていけば、間違いなく引く手数多の登録制度になるのではないだろうか。加えて、当市の「音楽の玉手箱」の様な助成制度があれば、優れた芸術を市民がさらに身近に感じられる事にも繋がりはしないだろうか。この点については質問もさせて頂いたが、まずは登



担当者に疑問をぶつける私

録者を増やし、それ以降に方法論として考える事とのご回答を頂いている。少なくとも登録者のパンフレットを見る限り、普段から精力的に芸術活動に打ち込んでおられる、正にプロの方が登録なさっているようだ。展開次第では非常に市民の文化向上へ寄与する事業となろうし、どこまでも膨らむ夢がありそうだ。今後の展開を注目したい。

※１…西尾市において現在アーティストバンクに登録されている方は以下の通りである

名 称	活動分野	活動可能日
BluePandaria	音楽演奏	土・日曜日
PAKUDA チャイムクワイア	トーンチャイム	土・日曜・祝日
市民ゴスペルグループワンボイス	音楽	土・日曜日
傳輝会	相撲甚句と津軽三味線	月・木・土・日曜日の午後
池田直美	オペラ歌手	要相談
鈴木俊哉	リコーダー	要相談
Kayoko-addintheworld	音楽(ピアノ弾き語り)	土・日曜日
草野公子	アンサンブル	平日随時可能、日曜は全日
磯村幸平	クラシック	全日可能
高原陽子	音楽(オカリナ)	要相談
榊原邦恭	ピアノ・作詞作曲	土・日曜日
田中孔波	ピアノ	要相談
maru	音楽・美術	全日可能
加藤洋輝	能楽(太鼓)	要相談
0084	絵画・ライブイベント	要相談
河合聖子	アート・妖怪	土・日曜日可能
山本壮太郎	イラスト・デザイン	全日可能
柵木志	映像制作	要相談
梅田朋美	映像クリエイター	要相談
デュオ リーリオ	音楽	要相談
神谷朱里	ピアノ	全日可能
なつみ (Natumi)	イラスト	全日可能
加藤英子	オーボエ	全日可能
阿知波弘人	パフォーマンス	土・日曜日可能

ご覧の通り市民のニーズと言うより明らかにアーティストの宣伝が第一義の目的に見える。

※２…春日市における「お宝百選」も推薦他薦のいずれかを問わず広く市内の一芸に秀でた方々を登録して頂き市民に芸術に触れる機会を増やすために創設されたものであった。音楽家からそれこそ将棋

に強い人まで広く登録し大変重宝がられた制度ではあったが、一定の役割は終えたとして2年前に一応事業としては廃止された。しかし、それまで百選に選ばれた方々は現在もボランティア等で活躍されている方も多くいらっしゃる。登録された方のためと言うより、あくまで市民に多く芸術に触れてもらう機会を増やすための制度であったのは間違いない。但し、その認定の基準等も含めて継続的な運営の難しさは当市でも実感している。

※3…「音楽の玉手箱」制度は、普段からプロとして活躍する音楽家と契約を安価な値段で結び、子ども達などに音楽の楽しさを知って貰う、本物の演奏にじかに触れてもらう事を目的として、その安価な価格のうち市が約半分を負担して希望者の所で演奏してもらう制度である。代表的な演奏機会としてはPTA主催事業などに招聘する場合がある。間違いなく普段触れる事のないプロの演奏を気軽に、しかも身近で聴くことが出来、利用した方々からは好評を得ている。間違いなく、演奏家は半分以上ボランティアであり、芸術の普及の為に役を買ってもらっている。制度としては手放しで称賛したいものである。

2 愛知県小牧市「学びの共同体事業」について

小牧市が学びの共同体事業を取り入れた背景は、平成17年当時、いわゆる生徒指導困難校であった市内の中学校において、生徒たちを落ち着かせる様々な取り組みを行う中から展開を始められた。当時の中学校の様子としては授業中に子供たちが寝てしまい、事業に全く興味を示さない状況であったと言う。この時の子ども達の気持ちは「つまらない。興味が無い。自分が参加しなくても何も変わらない。」と言った投げやりな気持ちであったと言う。この為、中学校の現場では①子ども達全員が参加できる授業の展開を目指し②子ども達が御互いに認め合える良質な人間関係の構築を進め③子ども達が熱中できる活動場面造りを整理した。当然のように授業が落ち着くことにより学習の理解度も上がり、互いを認め合う土壌も形成された。また自らが主体性を持つことで生き生きとした学校生活を送る生徒が増えたそうである。



具体的には一方的に教師が教えると言う行為自体をある種の「一方的なお節介」※4とまで位置づけて、生徒たち個々人が、自らの解らない、疑問に思う箇所を自主的にぶつけ合い、それを解る子が解らない子に教えていくと言う手法

を取った。この事で、生徒たちは、それまで気が付かなかった自分以外の仲間たちの多様な考え方に気づき、優しさを知り、改めて自分自身、即ち事故を知り得る機会になって行ったと言う。一方的に物事を教えると言う立場から離れた教師は、彼らの意見を常に耳を傾けて聴き、それを周囲の生徒たちに繋ぎ、時に脱線しそうな場合に軌道修正を行う事に専念した。各々の生徒が何を根拠に話しているかを知る事で現状のレベルを確認し、時に生徒同士で解決できない内容には正しい資料を示し、また次の段階として断片的な言葉から体系的な思考へと組み立ての手伝いを行い正常な学園生活へ引き戻していったと言う。この事によって間違いなく、荒れていた学校は平穏を取り戻したし、学力的な下位層を引き上げる事に成功したと言う。

現在市内において「子どもが授業の中で居場所を見つけ、自己を伸ばして確かな学力を身に付けていくことが出来る授業を作る（すべての子どもの居場所を保障する）」と言う理念を共有し、先ず教師自身が「学びあう学び」をより深く理解する為にも、専門家等を招いて研修を行い、更に子ども達に対する教育の一層の充実を目指している。現時点においては学校が落ち着いたと言う事でステージはさらに進み、今まで以上に授業の内容そのものが問われる様になってきている。^{※5}市の教育委員会が把握する乗り越えるべき課題もある。^{※6}今後も「質の高い授業が質の高い学びを生み、それが学力の向上につながる」事を市全体の課題として取り組んで行かれるようである。展開に注目したい。



※4…我々が普段考えている学校における教育の在り方と言うものは、間違いなく教員が生徒に対して一方的に何らかの教科を教えていくものである。子ども達は自らが知らない事を教えて貰いそれを身に付けていく。これが通常であろう。しかし、これを一方的なお節介とまで言い切る発想は確かに凄い。確かに、人間社会において一方的に人の話を聞くほど、いやむしろ聞かされるほど退屈でつまらないものは無い。自分にとって身に付ける意味や意義が見いだせない学校の授業はその最たるものであると言えるのかも知れない。非常に不謹慎であるが素直にそう思ったりはする。

※5…教育現場を見ていて時に感じるのは、人から何かを教わると言う事は、そのこと自体が既に一定の教育のレベルに達している必要があると言う事だ。個人個人の授業であればそれを見極めた上で、それこそ個人のレベルに合わせて位置から物事を教えて行く事も可能であろう。しかしながら学校

教育の現場においてそれは絶対に適わない。常に学級単位と言うグループで授業はすすめられていく。この際、当然のように個人個人で理解度や習得度に差が出る。多分、教育の現場において最も難しいのがこの見極めであろう。本来学校教育において理想とされ、定められているカリキュラムに沿って授業を進めて行ってそれに全ての生徒がついて来ればそれに越したことはない。だが、現実には決してそうはいかない。最初の一步からボタンを掛け違える子供もいるだろう。元来勉強とは体系的な学問である以上、基礎が無くていきなり最上階の景色を見ることは叶わない物である。授業の駒が進んで行けばいくほど、取り残された生徒は授業に参加することが出来なくなる。当然のように彼らは荒れる。これを食い止めれば確かに「荒れた」教室は解消されるだろう。だが一方で、この際既にレベルの高いものはどうなる。彼らは教えあう事で間違いなく大いなるものを得るであろうが、さらに上の学問への欲求が阻害されはしないだろうか。ここに踏み込んで行けるかどうかが今後の課題であると思われる。

※6…教育委員会からの説明では、今後の課題として 1. 教師の専門性を高める 2. 授業の工夫を怠らない 3. 教師の言葉を厳選する 4. 教科や学年を超えて話し合える教師集団の育成 5. 良質な人間関係の維持 6. 主体性を育てる取組 を挙げている。

3 愛知県大府市「幼・保・小・中連携教育」について

大府市においては平成11年度に幼保小中連携教育を進める活動が始まり、平成24年度に「大府市幼保小中連携教育の指針『きらきら』」を策定している。これは子供たちの環境の変化と社会の要請を受けて始めたものであるらしい。いわゆる「小一ギャップ」※7「中一ギャップ」と言う言葉が取沙汰され、不登校や集団不適合が問題となっていた



際に、発達の連続性や生活の連続性を確保し、園や学校種の違いによる式方法の違いや生活リズムの違いなどをなくし、子ども達が無理なく発達段階を乗り越えられるようにした。大府市においては子どもの理想的な姿を「心身ともに健康で知恵と愛を持つ子」と設定し、それを具現化した姿として

◎命を大切にし、思いやりのある言葉使いや行動の出来る子ども

◎自分や他人の良さを認め、夢や希望を持ち自ら学ぶ子ども

◎健康の大切さを知り、より良い生活習慣を身に付ける子ども

◎社会のルールやマナーを身に付け、地域と共に心豊かに生きる子ども

としている。これを12年間で目指していく形が連携であるとされ、現在4つの幼稚園、14の保育所、8つの児童センター、子どもステーション、発達支援センター、13の小中学校、福祉子ども部、教育委員会が一体となって取り組みを行っている。取り組みの主なものとしては、幼保と小学校においては其々の指導者による指導体験交流や情報連絡会の開催、行事への相互参加などを活発に行っている。また、小中連携についても同様に、学習参観を相互に行ない連絡会議を立ち上げるなどしている。



熱心に説明に聞き入る桸議員

事業開始当初は「どうしてそこまでするのか」と言った声も聞こえたものの、現在では何より指導者の意識に変化が出てきていると教育委員会は分析している。指針の中においても特に「礼儀」「姿勢」「生活習慣」「ルール・マナー」を12年間通して行う重要課題として挙げ、特に鉛筆の持ち方やお箸の持ち方と言った人間生活の基

本的な決まり事を、12年間を通じて徹底的に重きをおいて反復していく姿が伺える。また12年間の長い期間をかけての取組であるが故に、当然のように家庭や地域に対しても一貫して支援を要請できる、そんな仕組みづくりになっているようである。ただ、幼保小中連携が目指す4つの大きな目的として「段差の解消」「学力向上」※8「地域に根差す」「教員の意識を変える」とあるが、これについては当然、教育と言うものがすぐに答えの出るものではないし、また求めるものでもないだろうが、未だ目的達成には時間がかかりそうというのが教育委員会としての見解でもあった。今後更なる連携の強化と事業の発展には注目をしたい。

※7…「中一ギャップ」については今更説明するまでも無いが「小一ギャップ」なる言葉まで現在ではある事に先ず驚いたと言うのが正直な気持ちだ。これまで「年長組」である5歳児の子ども達は、それまで園の中であって「お兄さん、お姉さん」として扱われていたのが、急に小学校に入学して赤ちゃん扱いされ、それに戸惑うと言うものらしい。正直、何ともまあ、どこまでも子供に寄り添った素晴らしい気配りであると思う。ついにここまで子供を取り囲む環境は優れてきているのだと、唯々呆れる想いでもある。

※8…通常我々が思い、また実際に私立の学校で実践されている小中連携は、間違いなくこの「学力向上」に一番の力点を置いたものである。例えば社会科の歴史などが顕著であるが、何度も何度も同じような事を薄く学ぶより出来るだけ回数を減らして深く学ぶ方が能率的であるのは言うまでもない。多分、小中9年間の教科書をやってしまおうと思えば8年ぐらいで十分に習得することも可能なはずだ。残りの1年間を更なるステップアップや受験に充てるのも良いだろう。だが、公立学校の場合これが出来ない。なぜなら転入学があり平等な教育環境の確保が大命題として存在するからである。道徳や情緒面において連携事業が十分にその真価を発揮する事は理解できる。しかしながら、その安定だけを持って「学力向上」へは繋がらないであろう。これは間違いなく今後の課題と思われる。

【総括として】

今回愛知県の名古屋近郊の都市を視察に周らせて頂いた。ある意味、すぐ近くに名古屋市と言う、正に世界に冠たる大都市を抱え、そのベッドタウンとして発展している姿は当春日市に相通じるものがあると思っていた。だが、明確に様相が違う。これは最初の西尾市で感じたことだが、ここで聴かせて頂いた



「アーティストバンク」制度などは、間違いなく、そういった働きかけを行政としてやっておかないと、ある意味人材の流出が止まらないと言う事に対する危機感の現れである。市がその独自性を持つ市として存在価値や意義を明確にすることが正に市の存在意義の証明であり、大都市の周辺で個性を埋没させないがための生き残りの手段であると思われた。

これは、他の市も同様である。その点、少なくとも私自身の考え方の中には「福岡市あつての春日市」であるとか「なんとなく一括りの中で福岡」的な発想を持っているのであるが、こんな意識など何処にも無いようである。近隣都市との違いをいかに明確に打ち出せるかに自治体の存在意義を求めてそれを模索している様については十分に学ばなければならない。この事は素直に感じた点である。

その上でであるが、本来教育とは独自性が極めて発揮しにくい分野である。と言うよりも、国と言う大きな括りの中で教育を語る時に、どの地域においても同じ教育を受けることが出来るのが国民の権利である以上、即ち地域制においても平等を我が国の教育が標榜している以上、本来これは出来る限り他地

域に対して影響のない範囲でしかそれを発揮することは許されていないのが実情である。支障のない程度にこの独自性をいかに発揮するのは非常に難しい問題である。ただ、西尾市において拝聴させて頂いた生涯学習に関する分野は比較的その色を出し易い。何よりも先ず芸術家の視点に立った活動と言うのは発想がいかにも面白い。それが最終的に市民全般の芸術文化の振興に役立つのであれば確かにそこに目を付けるのも一つの手段であろう。ただ、私の様な捻くれ者は間違いなく、その全体からすると少数の、それも極めて定義があいまいな芸術家への女性とみられるような事業に対して反発は抱くであろう。だが、先程も言ったが福岡とは事情が違ふようだ。大都市に埋没してしまわない為に、即ち自治体の存在価値を内外へ知らしめるためには、その環境下においてはこういった思い切った囲い込みの手段も有効となるのであろう。「芸術家の優しい街」は確かに一つの大きな自治体への周辺住民へのインセンティブ成り得る。今後この事業の広がりを目を注ぎたい。

小牧市、並びに大府市の取組については、西尾市とは逆に、理想としてやりたいことが幾つもあったとしても、現実問題としてそれが出来ない制約の多い問題であることは明白だ。

「学びの共同体事業」に関しては、その理念と実際学級崩壊していた学校を正常な状態に戻らせたと言う実績において大きくその成果を評価するものである。だがしかし、問題がない訳ではない。人間がその学習や更に言えばその人生を一部の地域のみで完結させるのであればこの制度は正に夢の制度だ、非の打ちどころも無い。



だがしかし、現実はそうではない。如何に中学校で落ち着いて生活を送っていたとしても高校受験と言う難問にすぐぶち当たる。明確にこの仕組みは学力が下位の子どもに対して優しく、それを救い出すことにおいて優位性を発揮するものであると考えられる。そうだろう。解らない事を先生が一方的に教えるのではなく理解している子供同士で教えあうのだ。だが、その際、本来だったら更に先に進める子どもはどうなる。偏差値を70から72にしたい子ども達に対するケアがともすれば疎かになりはしないか気掛かりである。ただ、何も人生は偏差値が全てにおいて優先されるわけではない。また基礎学力もあって、加えて人間として他人を思いやる気持ちまで持ち合させた子供はある意味無敵だ。充分にその後取り返しはつくだろう。そこまで周囲が理解できるかが何よ

りも支障になりそうである。



「幼保小中連携」も理念としては十分に理解できる。ただ、私の極めて個人的な感想だけを優先させればあまりに情緒的な面でのケアを周囲の大人が気にし過ぎると子供の将来にとっては決して為にならない気がしなくもない。「小一ギャップ」や「中一ギャップ」を環境として回避する方策を周囲が取ったとしても、間違いなくその後「高一ギャップ」は訪

れよう。大学も、そして社会に出ても間違いなくそれまでの生活と今後の生活に対してギャップは味わう。時にそれは挫折感として感じるほどにだ。であるならば、ある意味、小学生の時や中学生の時に、叙情にその感性に慣れておくのも一つの方法ではないか。これを言えばお叱りを受けることを承知で言わせて頂くと、現在、あまりに子供の情緒に感傷、配慮するあまりにむしろ実社会において脆く壊れやすい若者が増えてきているのもある一面社会現象として存在する。純粋培養の中で子供は育たないし育てるものでもない。ただ、理不尽な扱いや、正に教育の場面において無駄を省く意味において連携が取れば、正にそこから無限の可能性が生まれるのも事実だ。となれば、この制度の発展を拒んでいるのは、国の教育に対する基本的な制度設計であると言えなくもない。

以上の事を総合的に判断すると、実はこれらの制度に限らず、各地で非常に有意義な教育に対するアプローチは行われている。だが、大原則として一地域で行えることに限界があるが故に、その制度の持つ本来の利点が今一つ発揮されてない現状があるのではないだろうか。だとすれば非常に勿体ない話である。本来はこういった制度をダイナミックに取り入れてこそ国の教育は飛躍的に伸びるのだ。どうもそれが国の教育制度と言う壁に阻まれて出来ないでいる。この辺りにこの国の教育の根本的な問題があるように思われてならない。

ただ、今回の視察においても非常に多くその言葉を聞いたのは「地域の力」である。学校教育がある一定の限界が初めから設定されている以上、それ以上のものを引き出すキーワードとして「地域」であるとか「家庭」の力が今以上に必要とされる。これは本来、この国においては元々在ったものだ。だが、それがいつからか教育を学校に任せきりになり失われつつあった。しかし先程も

言ったが、学校教育に一定の限界がある事が明明白白となった今日において再び脚光を浴びているのだ。実は、「学びの共同体」も「幼保小中連携」も。もしかするとわが市で行っていて全国から脚光を浴びている「コミュニティスクール」も家庭教育と地域の育てが以前のように明確であるのならば、今更一切必要のないものであ



議場を見上げ感慨深げな榊議員

るのかも知れない。ただやはりそれが現在非常に弱く希薄になっているが故に、行政からそれを呼びかけなければならないという現実はある。その意味で言えばある種の原点回帰であるのかも知れない。間違いなく今後の社会において求められるのは個性ある人材だ。だが、学校教育の現場は平等性を常にしている。であれば、やはり家庭は言うに及ばず地域がそれぞれの独自性を育てる工夫をしなければならない。教育の現場に家庭や地域の活力を求める。この事の重要性を再確認した有意義な視察であった。

御教授頂いた3市の行政職員の方々に心から感謝を申し上げる。

(次頁以降に参考資料添付)

総務文教委員会視察日程

平成26年度 総務文教委員会行政視察行程

平成26年4月25日現在

【視察地】

愛知県	西尾市	〒445-8501	西尾市寄住町下田 22	0563-56-2111 (代)	担当／小倉氏
愛知県	小牧市	〒485-8650	小牧市堀の内 1-1	0568-76-1168 (直)	担当／松宮氏
愛知県	大府市	〒474-8701	大府市中央町 5-70	0562-45-6251 (直)	担当／山田氏

【行程表】

月日(曜)	行 程	宿 泊 地 他
5月27日 (火)	午前8時15分：博多駅集合（新幹線12番ホーム） のぞみ14号 昼食 名鉄名古屋本線・西尾線 送迎 博多 == 名古屋 ... 名鉄名古屋 == 西尾 ... 西尾市役所 8:29 発⇒11:52 着 12:52 発⇒13:40 着 ◎ 愛知県西尾市行政視察 【午後2:00～3:30】 「アーティストバンク事業について」 送迎 名鉄西尾線・名古屋本線 徒歩 西尾市役所 ... 西尾 == 名鉄名古屋 ... ホテル着 16:01 発⇒16:49 着	担当者／小倉様 TEL (0563) 56-2111 昼食／名古屋駅周辺 夕食／名古屋駅周辺 宿泊先 グランドホテル名古屋駅前 名古屋市中村区名駅南 1-23-20 TEL (052) 541-3955
5月28日 (水)	午前8時40分：ホテルロビー集合・出発 徒歩 市営東山線・名城線・上飯田線・名鉄小牧線 ホテル発 ... 名古屋 = 栄 = 平安通 = 上飯田 = 小牧 9:05 発 ⇒ 9:14 ⇒ 9:29 ⇒ 9:31 ⇒ 9:45 着 タクシー ... 小牧市役所 ◎ 愛知県小牧市行政視察 【午前10:00～11:30】 「学びの共同体事業について」 小牧市役所 ... 小牧 == 名古屋 ... ホテル着	担当者／松宮様 TEL (0568) 76-1168 昼食／小牧駅周辺 夕食／各自 宿泊先 グランドホテル名古屋駅前 名古屋市中村区名駅南 1-23-20 TEL (052) 541-3955
5月29日 (木)	午前8時50分：ホテルロビー集合・出発 徒歩 JR東海道本線 送迎 ホテル発 ... 名古屋 == 大府 ... 大府市役所 9:19 発⇒9:42 着 ◎ 愛知県大府市行政視察 【午前10:00～11:30】 「幼保小中連携教育について」 送迎 昼食 JR東海道本線 のぞみ31号 大府市役所 ... 大府 == 名古屋 == 博多 13:27 発⇒13:41 着 13:52 発⇒17:14 着	担当者／山田様 TEL (0562) 45-6251 昼食／粋料理 なには TEL (0562) 45-9728 博多駅着 17:14 (予定)

西尾市アーティストバンク資料



小牧市学びの共同体資料

2014/5/19

「学び合う学び」の導入について

小牧市教育委員会
学校教育課
林 文 通

導入の背景

応時中学校の取組
＜現状把握＞
■授業中に子どもたちが寝てしまうのはなぜか
■興味を引かない子どもが多いのか
■つまらない、わからない、興味が無い
■自分が参加しなくても、何も変わらない
「どうせ自分なんか…」(投げやりな気持ち)

導入の背景

応時中学校の取組
＜実践に行ったこと＞
①子どもたちが全員が参加できる授業の展開
→「学び合う学び」
②子どもたちが互いに認めあえる良質な人間関係の構築
→「ラポラリー」方式による体験学習
③子どもたちが熱中できる活動場面づくり
→「主体性を大切にしている特別活動」

導入の背景

応時中学校の取組
＜成果と広がり＞
○授業が落ち着くことで、学習の理解度が上がった。
○学び合いや人間関係づくりの取組によって、互いを認め合う風土ができた。
○主体的な特別活動を通して、生き生きとした学校生活を送る生徒が増えた。
→公開研究会により取組が市内へ広がる

小牧市教育委員会がめざす学び

■平成17年度より、「小牧市教育委員会がめざす学び」として、「学び合う学び」を推進する。
■期待する成果
①課題を持って学び、新たな考えを築く子どもの育成
②子どもたちが互いに認め合い、より高い学びに到達できる授業をする教師の育成
③教師が、共に学び合う体制になる。

全体で共有していること

授業の転換 「一斉授業」→「学び合う学び」
■授業とは「素(学期)を教える授ける」もの
→ 主体は教師
■「学び合う学び」
→ 主体は子ども
■与えられる学力から 自ら獲得する学力へ(教師から) (子どもへ)

1

2014/5/19

「学び合う学び」とは...

■教える関係ではない
→一方的なお話し
■学び合う関係
→自ら挑戦する
・わからない事からの問いかけ
・他動的な学び
・良い人間関係が土台

学び合いの効果

■多様な考え・新たな出会い→自らの思考を促す
①対象(教材)との出会い
②他者(仲間や教師)との出会い
③自己との出会い

学びの中で大切にすること

■『聴き合う』
・相手の受け入れること
・これができる教師が多い
→しやべりすぎではないか？
■『わからない』と伝えること
・わからない子どもほど、自分で克服しようとする
→失敗と挫折

関わりを生み出す授業のかたち

■机をつくの字型に配置する
■4人グループ(市松模様)での話し合い活動を入れる
■「わからないこと」から授業をつくる
■テンションを下げる
■言葉を整理し、しゃべりを少なくする
■導入を大切に
■具体物を使う

授業中の教師の仕事

①聴く ②つなぐ ③戻す

2

2014/5/19

聴く

■つぶやきや発言の模倣は何か
■発言がテストのどことつながっているのか、仲間の発言のどれとつながっているのか
■曖昧な表現を、より具体的にするにはどうすればいいか
■子ども自身のそれ以前の考えや発言とどうつながっているのか

つなぐ

■子どもの発言をモロログ(独り言)にしないために、人やモノとつなぐ
「それはどこでそう思ったの？」
「どうしてそう考えたの？」

戻す

■子どもたちの発言を聴いて、思考が深まっていると感じたときに、教科書や資料へ戻す
→読み込むことで、新たな気づきが生まれる
■つまづいているときに、既習の知識や基礎基本に戻す
→原点に戻すことで、思考を組み立て直す

グループ活動の効果的な活用

■1度目は、下位層を引き上げる
■2度目は、全員でジャンプの問題に挑戦する
■課題と教師が、グループ活動の質を左右する

共有とジャンプ

■授業前半は、学力層の底上げを目指す(共有)
→グループ活動を通して、本時に身に付けたい基礎的な内容を理解する段階
■授業後半は、学びの質を高める(ジャンプ)
→学習内容をより深く広げ、学習内容の活用・応用・拡大・深化
全員でジャンプ課題に立ち向かうことに意味がある

乗り越えなければならない壁(課題)

■教師の専門性を高める(質の高い授業)
→子どもの関係性に甘えてはいけいない
■授業の工夫を怠らない(特に導入)
→子どもたちは授業に期待している
■教師の言葉を厳選する
→多弁が子どもを混乱させている事実
■教科や学年を超えて話し合える教師集団
■良質な人間関係(土台)の維持
■主体性を育てる取組

3

2014/5/19

ありがとうございました

4

大府市幼保小中連携事業資料

大府市幼保小中連携教育の指針

資料No.1



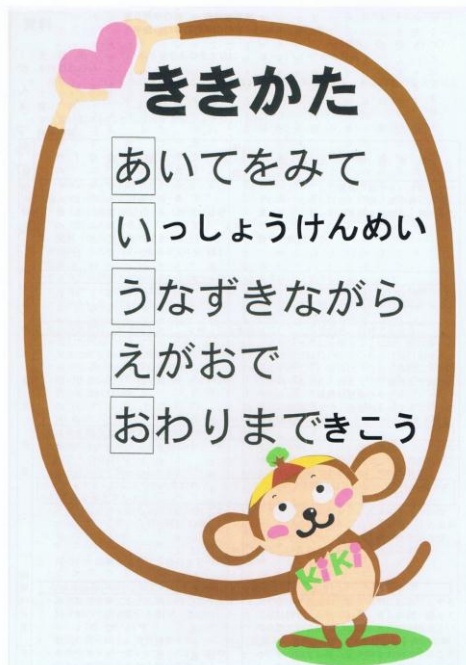
大府市
大府市教育委員会

きらきら輝く子どもの10か条

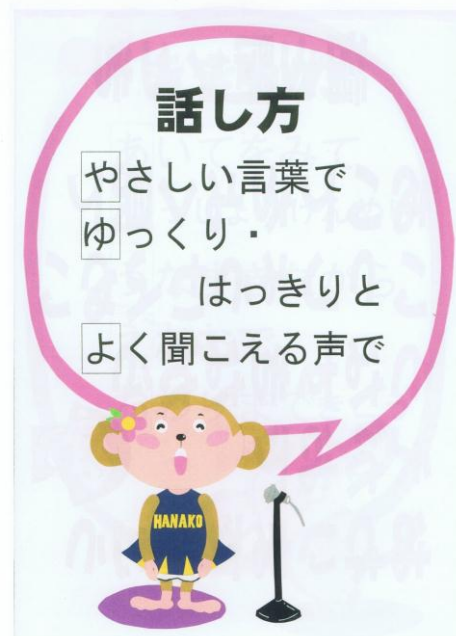
- 命を大切にします**
感じよう 世界にひとつの 大事な命
- 思いやりのある行動をとります**
自分が嬉しい みんなも嬉しい 自分が嬉しい みんなも嬉しい
- お互いの良さを認め合います**
見つけよう 誰かがもってる 良いところ
- 夢や希望をもちます**
大好きと 思い気持ちを 大切に
- 自ら学びます**
興味・関心を大切に 楽しいことから始めよう
- 健康づくりに努めます**
健康は 体も元気 心も元気
- より良い生活習慣を身につけます**
早寝 早起き 朝ごはん 元気の力がわいてくる
- ルールを守ります**
社会のルール よいお手本は 大人から
- マナーを身につけます**
意識しよう マナーは日々の 積み重ね
- あいさつで心豊かに過ごします**
あいさつが 笑顔をつくる 心をつなぐ

●市内一斉あいさつ運動／毎年5月と10月の「10日、20日、30日（平日）」に実施
●きらきらチャレンジ／毎月第3週に実施

— 3 —



— 34 —



— 36 —